

ギネス記録挑戦

ドタバタ記

本郷照代

今から六年前の平成十八年十月八日午後二時四十分。私の住む西尾市では、一万四千七十八人の人々がいつせいに路上の緋毛氈の上で自分で抹茶を点て、合図とともにそのお茶をいただきました。

この「ギネスに挑戦 西尾大抹茶会」は大成功をおさめ、その参加人数はギネス記録として登録されました。この時の様子は、新聞等で報道されましたので記憶の方もありでしょう。私は、少しばかり英語

ができるというので友人から依頼され、イベント当日までのほぼ一年余り、ギネス社との交渉や案内、通訳などのお手伝いをするという得難い経験をさせてもらいました。今日は、その日を迎えるまでのドタバタ記をお話したいと思います。

まず、ギネス社に記録挑戦の許可を得るというだけで半年かかりまし



た。ギネスブックに登録されるには、その記録がギネスブックのどの部門に該当するのか、またその記録がギネス社にとって記録挑戦に値するものかどうかについて事前審査というものがあります。そこで私は、ギネス社のサイトを通してどんな記録挑戦を計画しているか、ギネス社に魅力的な記録挑戦だと思われるような文言を考えてメールしてみました。依頼を受けてすでに一か月がたっていました。

返事が来るまでに通常三〜六か月かかるホームページにありましたので、ひたすら待ちました。年が明けても何の進展も見られず、しびれを切らした主催者側の商工会議所事務局からは「返事はまだか? もうこうなったらロンドンまで行って来たらどうだ!」と言われました。その旨メールすると「来ては会えない。来ないでください」とつれない返事だけはすぐに来ました。

三月末、やっとサイト上に返事が届きました。画面には、「その記録挑戦を許可します。ついては、添付した書面で正式に申し込んでください。ごありました。」

記録挑戦の許可は下りましたが、正式申請の前に行くつかの難問が控えていました。たとえば会場の問題です。一万人を収容できるホールや体育館、あるいは公園などは西尾市にはありません。そこで事務局が考え出したのは、市の中心通りに緋毛氈を敷き、そこを茶室に見立て

ていた。一万人がいつせいに抹茶を自分で点てていただく、というものでした。

この案を早速英訳してメールすると、ギネス側の回答は、「会場はクローズド、つまり閉じられた空間でなければならぬ」「どこからでも出入りできる開かれた空間は会場と認めない」というものでした。何度も何度もメールをやり取りし、最終的には「通りの随所に警備員を配置してしっかり監視する。また参加者全員の名簿を作成して会場の出入り口(ゲート)でチェックをする。」ということで承認を得ました。すでに蟬の声が聞こえる頃となっていました。

ある日、ギネス社からこんな申し出がありました。「イベント当日、本社の審査員を立ち会わせることにより、記録申請から通常六か月はかかる判定が、すぐその場で可能。ただし、その場合の費用は審査料として二〇〇〇ポンド。」というのです。これはイベントの大きな目玉になると、事務局に提案し申し込みました。しばらくすると、「審査員がマルコ・フリガツティ氏」に決まりました。今後は彼と連絡をとるようになり、「マルコ」ともスミーズに連絡が取れたわけではありません。というのは、彼は審査員として常に世界中を飛び回っていたからです。イベントまであと二か月というのにメールの返事が来ず、いらいらしながら待つ状態が続いたある日、彼から私の携帯に直接電話がかかってき

ました。その時私は、電車に乗っていました。しかも、ちよっとキザですが、結婚三十周年記念として何年も前から計画していたイタリア旅行の最中でベネツィア行き列車に乗っていたのです。あれだけ、日本で一日千秋の思いで連絡を待っていたのに、よりによってこんな時に電話がかかってくるなんて、と少々恨みがましく思いながら急いで列車のデッキへと走り出しました。せっかくの記念旅行なのにその後は列車の駅、空港、ホテルに着くたびにパソコンに飛びつき、マルコとのメールの送受信と日本の事務局との連絡にかかりきりになっていました。

日本に戻り、マルコを通してギネス社へさまざまな交渉、確認、報告等こなし、いよいよ明日は当日という十月七日を迎えました。ところがここで事件が起きました。その日、審査員のマルコはロンドンから成田経由で国内便に乗り換え、午後六時十分中部セントレア空港に着着する手筈になっていました。空港に迎えに行くこうと玄関で靴を履きかけた時です。家にFAXが一通届きました。

「強風のため、飛行機がヒースロー空港を出るのが4時間遅れた。マルコ」

えっー成田の乗り換えは一時間のはず。それでは間に合わない! 肝心の審査員がいなかったら明日のイベントは台無し! 彼は今どこ? パニックになりそうなのを必死に堪えて代替手段を考えました。新幹線だ、今日の最終便ひかりなら間に合う。とつさにANAの成田オフィスに電話して、メッセージボードを書いて入国ゲートで立っていただくという頼みしました。

「マルコへ。東京駅から新幹線に乗って名古屋へ。そこで待っています。さらに事務局に、今夜の歓迎会



は中止と連絡。それから宿泊予定のホテルには到着は夜中になるがよろしくと。つぎは、名古屋駅近くで深夜食事のできるところを予約しておかねば。あたふたと電話帳をめくり、電話をかけまくっていたら、当のマルコから電話がかかってきました。「今、東京駅に着きました。ANAから三万円もらいました。でも小銭が無いから長く話せません。これからどうすればいいですか?」

「十時の新幹線ひかりがあると思うからそれに乗って。名古屋へは十一時五十分ごろに着きます。名古屋駅で待っていますから、そこで会いましょう。気を付けていらしてください。」

夫と私は車で中部セントレア空港ではなく、名古屋駅へと向かいました。改札口でキドキしながら待つこと。南改札口に現れたのは意外なほど若くてイケメンのマルコ・フリガツティ氏でした。ちよつと照れたような笑顔が印象的でした。その後予約した店で一時間ほどつろいでホテルへと向かいました。着いたのは午前二時五分。事前に連絡しておいた吉良海岸のホテルではフ

ロント係がにこやかに長旅の客を迎えてくれました。明朝というか、朝九時に迎えに来るからと別れ、私たちは自宅へ戻り、眠れないうちに朝を迎えました。

約束の時間にホテルに迎えに行くのと、フロントに現れたマルコは、私たちの顔を見るなり、

「朝起きたら、目の前にボクの手まれたベネツィアと同じ風景が広がっていました!」と興奮した様子で一気にもくしたました。そうか、イタリアのベネツィア出身かあやっぱ、このホテルにしてよかつた! 彼の満足げな顔を見ながら、私はこの時なぜか、今日のイベントはきつと成功すると、確信していました。

約束の時間にホテルに迎えに行くのと、フロントに現れたマルコは、私たちの顔を見るなり、

「朝起きたら、目の前にボクの手まれたベネツィアと同じ風景が広がっていました!」と興奮した様子で一気にもくしたました。そうか、イタリアのベネツィア出身かあやっぱ、このホテルにしてよかつた! 彼の満足げな顔を見ながら、私はこの時なぜか、今日のイベントはきつと成功すると、確信していました。

- 本郷照代のプロフィール
- 1975年 南山短期大学卒業
 - 1975年 日本興業銀行勤務
 - 1985年 英語教室主宰
 - 1991年 日本大学(通信制)卒業
 - 1994年 タウン誌「みどり」編集委員
 - 2007年 一色町議会議員